

板書の書き方とノート指導

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

その一 板書とノート指導は指導技術の一つ

社会科教員をめざす学生のための授業である「社会科教育法」の中で「授業という言葉聞いてイメージすることは？」と聞かされると、「教師、生徒（児童）、教科書、ノート、黒板」の語句が多く返ってきます。これらは多くの人に共通するイメージではないでしょうか。それだけ黒板＝板書とノートは授業に欠かせない重要な要素と考えられます。

私が一昨年度まで関わっていた東京都教職員研修センターの「東京教師道場」では、授業力の要素として①使命感・熱意・感性、②生徒（児童）理解、③統率力、④指導技術、⑤教材解釈・教材開発、⑥指導計画・評価計画の作成・改善の6要素が示され、この6要素にもとづいて授業の実施と協議が行われ、部員相互の切磋琢磨により授業力の向上をめざしていました。6要素の中の④指導技術に板書とノートの項目があり、指導案の中に板書計画を示し、授業展開における板書の内容、タイミング、児童生徒のノート記録の仕方やノート記録の評価の仕方などを協議していました。

若い先生方に限らずベテランの先生でも、授業に関わっている限り、板書の仕方と内容、そして板書の鏡である児童生徒のノートの指導については頭を悩ます事項です。

その二 板書の意義を考えよう

授業に欠かせない板書ですが、なぜ板書するのでしょくか？ 板書を端的にいうならば、その時間の授業の中身が生徒に一目でわかるように示したものです。「中身」としたのは授業の内容と方法を含む、その授業時間の流れを示したものだからです。一目でわからない板書は良い板書とはいえません。言い換えると、生徒が積極的に取り組み充実した授業であっても、板書から充実した授業をふり返ることができなければ100%良い授業とはいえません。逆に、立派な充実した板書の内容であっても、教師の一方的な解説型の授業で、生徒にとっては受け身の授業では良い授業とはいえません。

板書は、教師から生徒へ一方的に提供するものではなく、1単位時間の授業の中で教師と生徒とのやりとりがわかる、生徒とともにつくった学習の流れを示したものと いえます。



ポイント②

板書は学習の流れがわかるもの
＝生徒とともにつくるもの

その三 板書の構成＝板書計画（板書案）を作成する

板書は、その時間の授業の流れ、学習の流れを示したものですから、指導案のように導入→展開→まとめの展開がわかる構成が必要です。授業の実施前に指導計画・指導案を作



ポイント①

板書技術をみがくことも
授業の達人への必要条件

成するのと同様に板書計画（板書案）を作成することが大切です。

一般的に1単位時間の授業の中身は1枚の黒板におさめることとされています。1枚の黒板を縦に2～3つに分けて、簡条書きを基本として書くほうが授業者としてまとめやすく生徒にとっても見やすく書き写しやすいと思います。また1枚におさめるために文字の大きさは手のこぶし大が適切と考えます。

はじめに左上に学習テーマを書きますが、教科書の見出しをそのまま書くことが多いかと思えます。しかし最近では生徒主体の授業として示すために「○○は～か？」という問いかけのパターンで書くことも多くみられます。学習テーマを書く意義は、本時の学習のねらいを示すことで、授業者としての説明責任を果たすことと、生徒の本時の学習への集中力を高め、意欲・関心を喚起することにあります。その学習テーマの下に生徒の予想、さらにその下か横の列に地図や資料、グラフ等から読み取ってわかったことなど、追究の過程をまとめていきます。最後に右下に追究して得たまとめを書きます。このような板書形式によって、問題解決的な学習を示すことができます。



ポイント③

問題解決的な学習の流れがわかる構成を

その四 板書のさまざまな工夫

①ビジュアルにまとめる

社会科の授業、とくに地理的分野の授業においては、文字だけの板書は避けたいものです。じっくり読み取らせたい地図やグラフ、図、写真は黒板に貼って集中させ重要性を示す必要があります。とくに地図は授業者が略地図で示すことも大切です。略地図を描くことも地理的技能の一つです。授業者が板書で略地図を示すことが生徒にとってノートに略地図を描き写す訓練となり、くり返すことによって生徒の地図力も高まります。

②カラフルに

ビジュアルにするためには2～3色のチョークを利用した板書が大切です。最近ではホワイトボード（白板）による板書も見られますが、この場合はなおさらです。黒板の場合は、重要語句を黄色で書いたり、黄色で下線や二重線を引いたりして強調する工夫が一般的です。略地図を描く場合も白1色ではなく、色チョークで示したほうが生徒にとってわかりやすく印象強く記憶にも残ります。

色チョークを活用する際には、色覚特性等の生徒の実態を把握したうえで、生徒に不都合がないよう配慮をする必要があります。

③記号を利用して構造的に

ビジュアルにするためにはカラーだけではなく、描かれた内容が構造的にとらえられる



図1 指導案への板書計画案 構成例 ※実際は板書の内容を書き入れます。

ことも大切です。ただ語句や箇条書きを並べたもの、ただだらと長い文章が書かれたものではわかりにくく見た目にも美しくありません。簡潔に事象を示すために、以下のような記号を活用して構造的に示す工夫があります。これらの記号が示す意味を、授業者と生徒との間での約束事として年度初めに交わしておくことが必要です。

→	関連, 変化, 結果
←	要因, 原因
↔ VS	対立, 戦い
Q ?	疑問, 問いかけ
A	解答, 回答

④カード, パネルの活用

効率的に板書するために、カードやパネルを活用する方法があります。

どのクラスでも同じ表現となる学習テーマや小見出し等は、磁石製のカード(短冊)にあらかじめ書いておいてくり返して利用することが考えられます。このほうが板書する時間を短縮できるだけでなく、チョークで書くよりもめだつという利点もあります。

最近では言語活動の充実の観点からグループでの話し合いをし、その結果を発表させる学習活動が多く見られます。そのときにグループでの話し合いのまとめを小さなパネルに書いて黑板等に貼り、それをもとに発表してい

ます。生徒が黑板に出て書く時間が短縮できるとともに、グループごとの意見を比較検討できる利点があります。パネルがない場合でも、模造紙を小さく切ったもので代用できます。これはグループの意見をまとめるだけでなく、前述した注目させたい略地図や概念図、グラフなどをあらかじめ描いておいてくり返し活用することにも使えます。

⑤事実と解釈・意見の区別を

社会科の学習は、事実認識とそれをもとに思考・判断・表現する力を育成することを主としています。言語活動の充実に伴って、地図や資料から読み取れる事実を根拠として、自分の解釈=意見を書いたり、発表したりすることが求められています。ともすると学習活動の中で、何が事実で、どれが解釈・意見なのかわかりにくくなり、結論もあいまいなままになることがあります。

そこで板書する際にも、事実と解釈・意見がわかるように色分けしたり、小見出しをつけたりするなど区別して示す工夫が大切となります。これは、生徒がノートやワークシートに記入する際にも意識させるべきことです。



ポイント④

授業者自身が見てわかる、
楽しくなる板書の工夫を

東京の市街地はどのように拡大したのか?
(八王子市)

○主題図の読み取り
・東京大都市圏の地価
・東京大都市圏の拡大

○資料から八王子市の変化を読み取るう

<p>A 地形図 ・1988年 ・1998年 ・2007年</p>	<p>B 八王子市の人口推移 (グラフ)</p>
<p>C 地域開発の主要経過 (表)</p>	<p>D 都心からの距離 (同心円地図)</p>

○各班の読み取り

○まとめ
・都心への機能集中=人口の増加
↓
・地価の上昇
↓
・郊外への市街地の拡大
↓ ※鉄道路線に沿って
・多摩地区や近県でのニュータウンの開発

図2 問題解決的な学習の板書例

その五 学習の記録をノートにするか、ワークシートにするか

学習の主体は生徒であり、1単位時間の授業で終わりではなく、学習の記録が残り、家庭等でそれをもとにふりかえり自主的に学習できるものでなくてはなりません。知識・理解を中心に評価していたかつてとは異なり、現在は生徒の資料活用の技能や思考・判断・表現の力も評価しなければなりません。そのために資料の読み取りの度合いや資料の読み取りをもとにした思考の過程をノートやワークシートに記述させることが必要です。

学習の記録として考えられるタイプには次の三つがあげられます。

①ノートだけ

資料活用の技能を重点的に評価する単元、思考・判断・表現を重点的に評価する単元を学習する際には、ノートに主要な地図、図、グラフ等を貼りつけ、読み取ったことやそれをもとに思考したことを記述させる欄を設けることが必要です。

②ワークシートだけ

基礎的基本的事項の定着のために、基礎的基本的事項を板書から書き写させる欄を設けるなどの工夫が大切です。

③ノートとワークシートの併用

基礎的基本的事項はノートにまとめ、資料の読み取りや思考の活動はワークシートを活用する併用のパターンが最も多いことと思います。この場合、ワークシートに載せたい事項は以下の通りです。

○読み取らせる資料（地図、図、写真、統計・グラフ、文章資料など）

○読み取ったことを記述する欄

A 読み取ったことをもとにした自分の解釈・意見

B グループで話し合った解釈・意見

C 学級全体の話し合いで出た解釈・意見

D 自分の解釈・意見の再構築

通常の間ではAまでの記述で評価しても良いのですが、思考・判断・表現の過程をしっかりと評価するためには、年間数回は、A→B→C→Dのプロセスで、自分と異なる意見を受け止め、見方・考え方を深めたか、広めたかを評価することが重要です。

上記の①、②、③のいずれの場合でも、生徒に記述させたものは、授業者がきちんと読み、評価することが責務であることはいうまでもありません。コメントを返すこと、時間がない場合は良かったと思う箇所にアンダーラインを引くなどして、ていねいに読み取り評価した証を返してあげるなど、生徒へフィードバックすることが一生涯懸命書いた生徒への返礼です。できればすぐれた記述を授業内で紹介したり、社会科の展示コーナーをつくってすぐれたノートやワークシートのコピーを貼って紹介したりすることが、書いた生徒のはげみとなり、また他の生徒への刺激や参考ともなり、生徒全体の「書く力」の向上につながります。



ポイント⑤

ノートやワークシートの記述を評価し、フィードバックすること

本稿を書くにあたっては、以下の文献を参考にしました。実際の板書例が多く載っています。若い先生方は目を通して、自分の指導に適合した板書技術をみがいてください。

《参考文献》

○青柳慎一 『中学校社会科 授業を変える板書の工夫45』 明治図書 2014年

○安野 功 『これでわかる板書&ノート指導』 成美堂出版 2014年